

早稲田大学大学院教育学研究科  
博士学位請求論文概要書

**メアリ・シェリー作品におけるロマン主義文学の廃墟的光景：  
男性英雄像の破壊、及び英雄に代わる女性像**

市川 純

2010

## 1. 論文の目的

本論文の目的は、メアリ・シェリー (Mary Shelley) がイギリス・ロマン主義時代の文学において、いかなる位置付けが可能であるのかを検証することである。

ロマン主義を代表する詩人達の多くは、それまでの文学に代わる、自らの新たな理念を明確に打ち出しているが、メアリは彼らのように自らの文学的理念を打ち出す発言が少ない。むしろ、彼女の研究を通して明らかになるのは、ロマン主義時代の革命的な文学精神や急進的政治理念に対する不安や反発である。ロマン主義がそれ以前の詩のあり方に対する抵抗や革命であるならば、メアリはその抵抗に対してさらなる抵抗を示している。この、ロマン主義への対立的な姿勢を読み取り、メアリの小説作品がロマン主義時代においていかなる意義を持つのかを本論文は考察する。

本論文では、メアリの作品をロマン主義文学の代表的な作品と衝突させ合うことによって、彼女のロマン主義文学の中での位置付けを探る。メアリの作品を男性詩人の作品と比較する研究方法自体は、これまでのフェミニズム批評にも見られ、事実フェミニズム批評が今日のメアリ・シェリー研究の礎を築いたと言えるのだが、既存の研究を手放しに賞賛することはできない。というのも、既存のフェミニズム的な批評のあり方が、新たなメアリ・シェリー研究を切り開く上で足枷となっていたからである。具体的には、メアリの後期の作品は前期の作品と比べて男性に対する対決姿勢が見えづらいため、フェミニズム批評の側からは評価しにくかった。そのため、メアリに関する論考は前期の作品に集中し、メアリ研究における批評的バイアスを生んでいた。本論文は、このバイアスを打破することを目的としている。批評のし易さという理由によってメアリの後期作品を無視するのではなく、包括的なメアリの小説論を展開する必要がある。

ただし、作品の散漫な概論にならないために、本論文を一つの視点、基準によって貫く必要がある。そこで、メアリ・シェリーの作品における前期と後期との一貫性を考慮した上で、一つのテーマを掲げた。それは、メアリによるロマン主義時代の英雄像に対する批判と、その英雄像に代わる新たな女性像の確立という問題である。メアリは、小説を執筆した自らの経歴において、特に前半期は徹底的にロマン主義時代の、男性によって具現化されていた英雄像を破壊していき、廃墟を現出させる。さらに後半期に至っては、英雄を滅ぼした後、英雄に代わる女性像を描くに至る。

このような視点に立ち、本論文はメアリの作品を、男性英雄像の批判と破壊、廃墟化、そしてそこから生み出した新たな女性像という順に考察し、ロマン主義文学に対するメアリ・シェリー作品独自の意義を明らかにする。

## 2. 第1章から第4章までの概要

### 1) 第1章

本章は3つの節からなる。第1節と第2節では主として『フランケンシュタイン』( *Frankenstein, or the Modern Prometheus* 1818 ) を取り上げる。第1節では、小説内部の議論に入る前に、副題の「現代のプロメテウス」の意味について考察する。プロメテウスはロマン主義時代において重要な意味を持ち、バイロン( George Gordon, Lord Byron )やパーシー・ビッシュ・シェリー( Percy Bysshe Shelley ) がプロメテウスを取り上げた作品を残している。彼らの描いたプロメテウス像を、その元となったギリシア神話におけるプロメテウス像にまで遡ると、アイスキュロスの『縛られたプロメテウス』からの影響が強く見られる。

バイロンの「プロメテウス」( 'Prometheus' 1816 ) では、圧制者としてのゼウスに苦しめられるプロメテウスが、強い怒りを抱き、ゼウスは滅ぶべきものとして捉えられている。さらに、プロメテウスによって恩恵を施された人類には、プロメテウスのイメージが重なる。プロメテウス同様に孤独の中で悲しみと苦しみに喘ぐ人間は、ゼウスの暴政に惨敗した存在ではなく、苦境をものともせず勝ち誇り、「死」( "Death" ) を「勝利」( "Victory" ) に変えてしまう。"Victory" はフランケンシュタインの名、ヴィクター( "Victor" ) を暗示させる他、フランケンシュタインは少なくとも一度は死に勝利して怪物を製作している。だが、フランケンシュタインはバイロンのプロメテウスのように決して賞賛されず、むしろ死体を蘇らせてしまったことにより、悲劇的な結末を迎えなければならない。これは『フランケンシュタイン』が「プロメテウス」の一種のパロディであることを示す。

パーシーの『解放されたプロメテウス』( *Prometheus Unbound* 1820 ) もまた、アイスキュロスの影響を強く受けているが、ギリシア神話には認められないパーシー独自の思想が付与されている。プロメテウスはゼウスより完成された、高度な性質を持ったものとされている。一方のゼウスはたとえ強大な力を持っていても、内面的に劣ったものとみなされ、プロメテウスの前に滅ばざるを得ない。

この作品は、『フランケンシュタイン』と比較すると、問題を含む記述が含まれている。『解放されたプロメテウス』の中には、神話によって語られていた事象が科学によって解明されることが示され、『フランケンシュタイン』との関係から考えれば人造人間の創造すら連想させる。また、薬学の知識によって病や死の苦しみを克服するくだりは、ヴィクターの抱いていた野望とも対応する。パーシーはプロメテウスが人類に与えたものを、文明の発展という観点から恩恵とみなしている。これらの負の側面を際立たせたのが『フランケンシュタイン』であり、パーシーの神話世界で語られていた科学的知識を近代世界において実現させることの危険性を描いている。それを「現代のプロメテウス」という言葉で題名に冠したことは、パーシーの作品と対照させれば皮肉めいたものとなる。

メアリアが「現代のプロメテウス」という言葉を打ち出した際、同時代の詩人達による英雄と

してのプロメテウス像が存在していたことを、敏感に感じていたはずである。その中で敢えて英雄ではなく、自滅的で、最終的には勝利者であるより敗北者に他ならないヴィクターに対し、「現代のプロメテウス」の名を冠したことは極めて警告的である。メアリは当時のプロメテウス像の虚を衝いており、ロマン主義文学におけるプロメテウス礼賛の風潮の中であって、それとは異なる独自の立場を打ち出したことは重要である。

第2節では『フランケンシュタイン』が錬金術への言及や様々なロマン主義時代の詩作品の引用により、当時の英雄像の批判を繰り広げていることについて考察する。フランケンシュタインは子供の頃から中世の錬金術に没頭しており、彼の科学が持つ中世的イメージはコウルリッチ (Samuel Taylor Coleridge) の「老水夫の唄」(‘The Rime of the Ancient Mariner’ 1798) のイメージによって強化されている。この詩のイメージはロバート・ウォルトン (Robert Walton) 船長の描写にも使われており、両者の共通性が示されている。錬金術への耽溺は、パーシー自身の伝記的事実とも重なり、フランケンシュタインとパーシーとの重なりが垣間見られる。フランケンシュタインは、自身を傷ついた鹿にもたとえており、パーシーが「エピサイキディオン」( *Epipsychidion* 1821 ) や、『アドネイス』( *Adonais* 1821 ) の中で自分をアクタイオンにたとえた修辞と共通する。

これまでのイメージの連鎖をすべて繋げると、ウォルトン = 老水夫 = フランケンシュタイン = アクタイオン = パーシー = 現代のプロメテウスという六つの相補分布が完成する。これらは皆、自らの行為によって自滅の道を進む危険な存在であり、メアリはこれらを一冊の小説によって罰している。ここには一貫した批判の対象の連鎖がある。メアリは一貫して自然の摂理に背く、強烈な野望を抱いた人物を、破滅させることで批判している。『フランケンシュタイン』では、特に中世趣味を近代科学と絡ませることで、生命の人工的創造という問題を提起している。ここにはパーシー・シェリーの姿も色濃く滲み出ており、フランケンシュタイン = 現代のプロメテウスを批判的に描くことで、パーシーも強い批判の対象となっている。

第3節では、メアリによる英雄像批判を、歴史ロマンス『ヴァルパーガ』( *Valperga* 1823 ) を通して考察する。この作品は発表当時、おおむね好評であり、保守的で知られる『ブラックウッズ・エジンバラ・マガジン』( *Blackwood's Edinburgh Magazine* ) も本作を評価していた。この雑誌が『ヴァルパーガ』を評価しているということは、『ヴァルパーガ』が当時の保守的なディスコースの枠組を逸脱しないものと見られていたからである。しかし、メアリは物語の中で主人公の英雄的人物であるカストルッチョ (Castruccio Castracani) を貶め、女性の立場から批判的に見ている。本節は出版当時の保守的な書評が気付かなかった、この作品に見られる斬新な英雄像批判を読み取り、『フランケンシュタイン』に続くロマン主義時代の英雄像の批判について検証する。

『ヴァルパーガ』の物語の大枠は、カストルッチョを主人公とした歴史ロマンスであり、実際、小説の最初はカストルッチョの家系について語られ、その後、少年時代、青年時代と彼に焦

点が当てられて物語が進行していく。しかし、物語はカストルッチョの視点から一直線に進むのではなく、二人の女性を介して二項対立、三角関係、と複雑に拮抗関係を変えていく。このように関係性が順次変わっていくところにメアリの英雄批判の視点が見られる。幼馴染の間柄であるカストルッチョとユーサネイジア (Euthanasia) は政治的立場の違いから二項対立を生むが、そこに新たな女性ベアトリーチェ (Beatrice) が登場することにより、男女の三角関係が生まれる。しかし、暴君となったカストルッチョに対抗する被害者という形で二人の女性の結びつきは強くなり、ここに新たな男女間の二項対立を生んでいる。最終的にはカストルッチョを物語の本筋から追放することにより、この歴史ロマンスは既存の英雄礼賛ではない、カストルッチョ批判のロマンスとなっている。

## 2) 第2章

第2章では、主として『最後の人間』(The Last Man 1826)を取り上げる。この作品では、メアリによる男性英雄像の批判が徹底的に推し進められ、ロマン主義時代の終焉を告げる廃墟が現出する。メアリはいかにしてロマン主義時代の終焉を廃墟として描き、その廃墟表象は、ロマン主義時代の男性詩人がしばしば描いた廃墟と比較して、どのような特徴を備えているのかを論ずる。

第1節では『最後の人間』を政治的側面から考察する。疫病勃発以前の世界として描かれる21世紀のイギリスでは共和制が実現しており、ゴドウィンの政治思想や、それに共鳴したパーシーの理想的社会が実現している。この作品はモデル小説であり、パーシーは護国卿エイドリアン (Adrian) として登場、バイロンはレイモンド卿 (Lord Raymond) として登場する。レイモンド卿はギリシア独立を目指してトルコとの戦いに赴くが、そこでメアリはパーシーの「無秩序の仮面」(The Mask of Anarchy 1832)を引用する。メアリはレイモンドをバイロンとして見ているだけでなく、バイロンの英雄的なイメージをパーシーの「無秩序の仮面」にも見出しており、パーシーが見出したヒロイズムをバイロンにも重ねている。

このヒロイズムが、後に発生する疫病によって破壊され、否定的に捉えられることにより、連鎖的にバイロンとシェリーのヒロイズムも否定される。『最後の人間』は前半部分でバイロンやパーシー等の英雄的側面を描き、これを後半で疫病によって破滅させ、廃墟を現出させる構造を持っている。メアリはパーシーやバイロンの考える政治的立場や、果てしない理想主義には賛同せず、これを危険なものとして徹底的に批判している。メアリの問題意識は、一個人の問題意識から、世界を巻き込む政治的問題へと発展しており、ロマン主義時代の英雄像に対する彼女の批判の最終的な形が『最後の人間』に結実している。

第2節では『最後の人間』を取り上げながら、メアリが描く廃墟そのものの特異性に注目する。ロマン主義文学では、しばしば廃墟が表象されたが、この時代の英雄像を破壊した上に成り立つのがメアリの廃墟であれば、その廃墟はロマン主義詩人が描いていた廃墟とは異なって

いるはずである。

『最後の人間』の結末では、疫病によって主人公ライオネル・ヴァーニー（Lionel Verney）以外の全ての人類が滅亡している。そこに現れる廃墟はヴァーニー以外誰一人見る者がいない、完全な孤独の世界に佇む廃墟である。ワーズワス（William Wordsworth）やバイロンにも廃墟を歌った詩はあり、そこには過去への思いや、作者の孤独といった、『最後の人間』の廃墟と共通するものがある。しかし、他者が存在しない完全な廃墟を描いたのは『最後の人間』の重要な特徴である。

メアリはロマン主義詩人達が去った後の時代の廃墟表象を描いた。ここには、ロマン主義第二世代の詩人達が亡くなった後の、孤独感の極まったメアリの姿が反映している。このような個人的な絶望の心境が、廃墟表象というロマン主義文学の特色の一つと混ざり合い、さらに19世紀前半の終末論的物語の流行と合致して『最後の人間』は生まれた。しかも、それまでのロマン主義詩人が廃墟を通して描いたことを全て疫病によって破壊し、その上で廃墟を描くという究極の廃墟文学、メタ廃墟文学をメアリは成し遂げている。

メアリは『最後の人間』の中でバイロンやパーシーのイメージを随所に散りばめ、しかもその野望を批判し、ロマン主義時代の様々な理念を廃墟にしたのだが、第3節ではそのようなメアリの批判を免れたワーズワスとメアリとの関係について検討する。

メアリが描く廃墟は、ロマン主義時代の英雄像との関係から見ると、二種類に分けられる。一つはメアリの批判の対象を表すものとして、破壊された英雄像が廃墟となって現出したものである。『最後の人間』における廃墟はその最たる例である。これに対してもう一つ考えられるのは、英雄の犠牲者になったものを描く廃墟である。具体的には『フランケンシュタイン』におけるワーズワスの「ティンターン修道院」(‘Tintern Abbey’)の引用である。この引用は、クラークの自然愛を描写している。ここで描かれる自然は神聖不可侵なものであり、ここを侵すことがフランケンシュタインの被る悲劇を引き起こす。クラーク自身は批判される対象ではなく、批判されているのはフランケンシュタインであり、その犠牲者がクラークである。

メアリは当初、ワーズワスの作品を引用することによって、廃墟を通じた自然への愛を提示した。やがてメアリは『モーリス』( *Maurice, or the Fisher's Cot* 1998 )における廃墟表象において、引用に頼らず、独自に廃墟を描いている。廃墟表象において、メアリとワーズワスとはある程度共通した地盤を持っている。

メアリとワーズワスとの共通した要素を見ることで、反対にパーシーと対立する要素も明らかになる。ロマン主義のある理念に対して批判的である場合、逆にそれとは別の理念と親和性が高くなる場合がある。その例がメアリによるワーズワス受容の性質である。メアリの作品にパーシーやバイロンに対する批判を読むことができても、ワーズワスへの批判を読み取ることはできない。むしろ、パーシーやバイロンのイメージを伴った英雄像や理想像の犠牲者がワー

ゾワスのイメージを伴って描かれていることは注目に値する。

### 3) 第3章

男性ロマン主義詩人、特にパイロンやパーシーの抱いていた英雄像や理想像を徹底的に破壊した後、メアリは代わりに何を提示したのかを考察するのが本章と、第4章である。第3章では、特に男性英雄像の被害者として出発した女性の姿に焦点を当てる。

第1節で主に取り上げるのは『マチルダ』(Matilda 1959)である。男性を英雄的主人公として登場させ、この英雄を批判するという意識がある限り、その支配を受ける女性は、この男性の被害者として扱われる。父親による娘への近親姦をテーマにした『マチルダ』はその端的な例である。近親姦を主題として取り上げることの多いイギリス・ロマン主義文学作品やゴシック小説と比較した際、『マチルダ』独自の特徴とはいかなるものなのかを本節は明らかにする。

『マチルダ』が近親姦という主題を扱いながらも、他のロマン主義文学やゴシック小説と一線を画すのは、何よりも著者が女性ということである。つまり近親姦関係における被害者の性の側から主人公を描き、この問題を議論している。しかも、父親が近親姦的情愛を持ちながらもそれを具体的な行動に移さず、自己破壊的な行動に走るという展開は『マチルダ』独自のものであり、父親の複雑な心理描写は、近親姦を扱った当時の他の文学作品とは趣を異にする。

男性によって書かれたロマン派文学の詩やゴシック小説に見られる近親姦は、近親姦の被害者からの視点は全く欠けており、憧憬の対象とみなされたり、あるいは悲劇的でおぞましい雰囲気醸し出す一つの装置として機能している。このような、近親姦に対する男性の心の葛藤が描かれない作品に対し、自らの近親姦的情愛に悩み、苦しみ、葛藤を抱えるマチルダの父親の姿は対照的である。このような父親像を提示しえたところに『マチルダ』の意義がある。

第2節では二つの歴史に取材した作品『ヴァルパーガ』と『パーキン・ウォーベックの運命』(The Fortunes of Perkin Warbeck 1830)における女性像に注目する。

『ヴァルパーガ』では歴史の影に追いやられていた女性達が活躍する。男性中心の政治によって作られてきた歴史の中で、この小説は周縁に置かれていた女性を大きく物語全体に絡ませており、歴史的事実として存在するカストルッチョの伝記的、歴史的事象にロマンス的要素が加わり、歴史ロマンスとして仕上がっている。

本作が出版された当時のイギリスでは、カストルッチョは英雄としてマキャヴェッリ(Niccolò Machiavelli)の著作を通して知られていた。しかし、メアリはカストルッチョを英雄ではなく暴君として描いている。彼は少年時代から名声こそが人を神にするものである、と冒瀆的な言葉を吐いており、事実、彼は冷酷無慈悲な暴君として成長する。彼の姿はフランケンシュタインとも重なり、神の領域を侵犯する人間である両者は、共に破滅への道を歩んでいる。

異端信仰を持つ女性ベアトリーチェの存在は、異端でありながらも純粋な信仰を持つ者として、カストルッチョとは対照を成す。彼女は異端でありながらも、正統の側に立つ男性権力者

達の問題を突き、批判する役割を担っている。彼女には聖母マリアのイメージが重ねられ、伝統的な異端と正統の価値観を覆している。また、ベアトリーチェ・チェンチ (Beatrice Cenci) のイメージも重ねられ、男性権力者の犠牲者としてのイメージも担っている。

異端的要素を多く持つベアトリーチェに対して、ユーサネイジアは容貌も身分も対照的であるが、両者は対立していない。カストルッチョが流神的であれば、異端であるのはベアトリーチェであるよりもカストルッチョということになる。そして、メアリが批判するのは流神的暴君カストルッチョである。そのため、ベアトリーチェとユーサネイジアとの間の信仰の種類における違いは大きな問題ではなくなり、両者は強く結び付く。ここにはカストルッチョに対抗する大きな女性原理の登場が見られる。

カストルッチョの姿にはチェンチ伯 (Count Francesco Cenci) や、同時代のナポレオン (Napoléon Bonaparte) といった権力者達の姿も重なり合い、断罪されるべき存在として描かれている。そして、メアリはその断罪を行うに当たり、ユーサネイジアとベアトリーチェという二人の女性を補うことによって、暴君批判の文学作品を生み出した。これは、女性による歴史文学への一つの挑戦であり、この挑戦は女性自身を歴史の中に描く手法によって成された。

『ヴァルパーガ』は、カストルッチョを巡る史実の上でユーサネイジアやベアトリーチェのような女性が存在しないため、これらを虚構の登場人物として作り出し、歴史ロマンスの形態を取って女性による男性英雄批判を行った。これに対して『パーキン・ウォーベックの運命』は、史実上存在する女性を用い、より歴史に忠実な形で女性に注目した作品である。

薔薇戦争はヨーク家のエリザベス (Elizabeth) がヘンリ7世 (Henry VII) と政略結婚してテューダー朝が開かれることによって終結を見たが、メアリはこの政略結婚の裏側にある私生活に注目することにより、虐げられた女性の存在を克明に描いている。エリザベスの他、パーキン・ウォーベックと結婚したキャサリン (Katherine) のとまどいに満ちた心理描写等、史実の裏に隠れた私生活の中でも、特に女性の生活に注目しているのが『パーキン・ウォーベックの運命』である。これはスコット (Walter Scott) のような、当時の男性の歴史作家には見られない特徴である。

メアリはさらに、男性の英雄に揺さぶりをかけている。それは、男性の騎士達に指示をする勇敢なモニナ (Monina) の姿に如実に表れている。仲間の男性を助けるために果敢に危険な領域へと向かうモニナには“heroic”の語が使われ、男性の英雄的物語へ女性が参入する可能性を示唆している。

『パーキン・ウォーベックの運命』の最後には「結論」が付けられ、物語全体をキャサリンの語りにも収めている。さらに著者自ら注を施して彼女への愛着を語るといふ、メアリなりの女性像の描き方が歴史小説を通して示されている。このように女性に注目した新しいタイプの歴史小説をメアリは書いた。メアリはその後、ヴィクトリア朝的な家庭小説を書き、より女性を描きやすいジャンル選択が行われるが、その前段階として、歴史小説の、しかも史実の裏に隠



れた女性をどこまで詳しく魅力的に描けるかという問題を探求している。

第3節では、これまで見てきた受動的な被害者としての女性の姿ではなく、男性の英雄達が支配する領域、特に戦場へと赴く女性達に注目する。メアリが描く女性達は専ら男性支配の被害者であり続けたのではなく、進んで男性的領域に乗り組んだ者達もいる。ただし、そこには制約があり、通常侵入することが許されない領域故、男装という手段を用いている。

メアリにとって男装は自身の特異な伝記的事実とも絡み合っている。メアリは友人が医学を学べるように男装するのを手伝ったり、女性同士の結婚を成功させるために男装させたりしていた。医学の勉強も、女性同士の結婚も、当時の女性には許されなかったものであり、男装は、このような状況を打開するための手段であった。このような切実な体験を踏まえた上でメアリは男装を描いており、エリザベス朝以来の陳腐なモチーフを繰り返していたわけではない。そのため、メアリ作品における男装は、戦争や政治的問題と結びついていることが多く、女性は命がけで兵士の格好をして男性的領域に乗り込んでいる。

#### 4) 第4章

第4章では『ロドア』(Lodore 1835)と『フォークナー』(Falkner 1837)を取り上げ、メアリがたどり着いた、最終的な女性像がどのようなものなのかを検証する。前期の作品は、英雄を批判的に描くためにも、英雄が広く活動する大掛かりな舞台設定が必要であり、作品の世界観は大きなものであった。それが『ロドア』や『フォークナー』を執筆する時期になると、作品舞台は縮小していく傾向があり、これが保守的と評価される原因になっている。しかし、作品内における女性への視点の大きさは逆に拡大している。初期の作品では男性英雄の影に隠れ、存在感の薄かった女性の登場人物が、これらの作品では大きな存在感を持ち、主人公の位置に迫り来る。ここには、物語における男性中心の世界から、女性の領域拡大への移行が見られる。

第1節では主に『ロドア』を取り上げる。本作は出版当時大きな人気を博したが、今日においてはあまり評価されていない。その原因はこの作品の本質的特徴と、メアリの批評史的問題とが関係している。つまり、メアリは『ロドア』を通して母メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)の批判をし、メアリ・シェリーを発掘したフェミニズム批評を裏切っているのである。

ヒロインのエセル(Ethel)はウルストンクラフトが批判したミルトン(John Milton)の『失樂園』(Paradise Lost 1667)におけるイヴ(Eve)に倣った教育を施され、父、ロドアの喜びとなる存在になっている。しかも、このような教育をエセルは礼賛している。この父のおかげでエセルは生まれ、エドワード(Edward)との恋愛結婚も成立している。エセルと対照的に、男性に劣らず高い教養を身に付けた人物としてファニー(Fanny)という女性も登場する。彼女にはウルストンクラフト的な側面が見られるが、『ロドア』においては、どちらの女性の価値観が正しいとされているわけではなく、両者が共存し合っている。19世紀における教養を身に

付けた女性の生き方として、メアリ・シェリーは、ウルストンクラフトのように革命的な考えは持たず、むしろ、穏やかに既存の社会の枠内に収めようとしている。しかし、女性は確実に物語の中心的領域に参入している。これが、男性の英雄像を徹底的に破壊した挙句に生まれた世界において示し得る女性像だったのである。世界はメアリが憎み、批判していた状態から、より穏やかな状態に近づき、エセルのような女性を描くことになった。

第2節では主として『フォークナー』を取り上げ、ロマン主義時代最後の年に示したメアリの小説の女性像が、それまでの作品と異なっているのかを明らかにする。

『フォークナー』はゴドウィンの『ケイレブ・ウィリアムズ』(*Things As They Are; or The Adventures of Caleb Williams* 1794) と似た構造を持っている。また、メアリは『フォークナー』と同時進行でゴドウィンの伝記執筆も行っており、この作品には娘から父への強い思いが滲んでいる。

孤児のエリザベス (Elizabeth) は養父のフォークナーへ強烈な父性愛を示している。この父性愛は彼女と結婚するジェラード (Gerard) の対照的な母性愛、及び父への憎しみによって際立たせられている。彼女がフォークナーの生命を常に救う存在であることを見逃してはならない。この作品の主人公は紛れもなくフォークナーであるが、彼の生命は常にエリザベスによって左右される。『フォークナー』に登場する男性は兵士や政治家のように権力を振りかざして女性を犠牲にすることはない。それに対して女性の方もこれに抗うことなく、当時のごく一般的規範に沿った行動を取る。ただし、時代的規範に沿った女性像を提示しながらも、女性には男性の生死を左右する強い影響力が与えられており、メアリの後期の作品を特徴付ける新たな女性像が巧妙に描かれている。

女性の登場人物は初期の小説から次第に存在感を強め、『フォークナー』では主人公の人生を左右する存在になっている。しかし、作品のタイトルが養父の名であることは変わらない。メアリが小説中の女性に託したのは、主人公になるのではなく、主人公の存在を揺るがし、その優越性に疑義を呈す大きな力を持つことなのである。従って、主人公そのものになることは許されない。作品では一応、男性優位に見せておき、女性は時代が要請する社会的規範を侵さない。しかし、タイトルの裏には、したたかに女性の活躍の場が提供されており、その範囲の中で重要な活躍をしている。

### 3. 結論

これまでのメアリ・シェリー研究では、メアリの作品に関する論考は前半期のものに集中し、作家の全体像が統一的な視点で語られることが少なかった。このような状況を打開する一つの試みとして本論文は位置づけられる。ロマン主義時代の英雄像や理想像を批判的に見る前期の作品が重要であることは確かだが、その前期作品が、後期の歴史小説や家庭小説的な作品と異なっているのかを本論文は考察した。そして、筆者は後期作品の重要性を常に考慮に入れながら前期作品の特徴を論ずることに努めた。

20世紀末に起こったメアリ・シェリー・ルネサンスを経ても、いまだ前期と後期を一貫した視点で見るメアリ・シェリー論は数少なく、これは現在のメアリ・シェリー研究における課題として残されている。この課題への一つの回答が本論文である。